

『おくのほそ道』宮城野の条考

——「紺の染緒つけたる草鞋二足餞す」をめぐって——

太 田 清 子

一、はじめに

仙台での芭蕉吟、「あやめ草足に結ん草鞋の緒」の句には従来大別して二通りの解釈がある。

ひとつは、あやめ草を実際のもとする解釈で、句意は、時節のあやめ草を草鞋の緒に結んで旅立とうということになる。その場合、あやめ草を足に結び付ける理由は、①邪気を払うためとするもの、②世間の人々が軒に葺くあやめ草を旅人である自分は草鞋に結び付け、旅人としての境涯を示唆するためとするもの、③折からのあやめ草を風流のために草鞋に挿すとするもの三説が行なわれている。右の解釈は、いずれも、本文には加右衛門から贈られた草鞋が特に紺の染緒のそれであったという記述があるのに、そういう草鞋にあやめ草を結び付けるといふ発想が生まれる必然性がなく、句の下五「草鞋の緒」に本文の記述を生かすことができないという問題点を持つ。

今ひとつは、あやめ草を紺の染緒の見立てとする解釈で、句意は、贈られた草鞋に付いている紺の染緒はまるで時節のあやめ草のようだ、あやめ草を結んだ気持ちで旅立とうということになる。紺

の染緒をあやめ草と見なして、あやめ草を足に結び付ける風狂に與じているとするものである。^(註1)

さて、この二通りの解釈は、あやめ草を実際のもとするか紺の染緒の見立てとするかという点においては対立するが、紺の染緒自体よりもあやめ草を話題とすることの方に関心があるという点では共通している。即ち、前者はあやめ草を草鞋に結ぶという思いつきを句の眼目とし、後者も、紺の染緒をあやめ草に見立てて、それを足に結びつける風流に興ずるところに句の面白味を求めたもので、紺の染緒はあやめ草を想起させるところに意味があるということになる。しかし、このような解釈は、あやめ草に関心を置き過ぎていると思われる。この句は加右衛門が紺の染緒の草鞋を餞別した折に詠んだものであることを考えると、もう少し紺の染緒の意味について考え直してみる必要がある。

小稿では、従来の句の解釈に対する以上のような疑問から、芭蕉の句を地の文との関わりで見えていくことを通して句意を明らかにするとともに、加右衛門が餞別した紺の染緒の草鞋の意味を探ってみたい。

二、あやめ茸く日と色彩

加右衛門が紺の染緒の草鞋を芭蕉蓮に贈ったのは、曾良の日記によると五月七日である。端午の日を数日過ぎてはいるが、『枕草子』二三〇段に「五月の菖蒲の秋冬過ぐるまでであるが」と記されているように軒の菖蒲は端午の節句当日を過ぎてても直ちに撤去するものはなかったと考えられ、紺の染緒の草鞋もやはり軒に菖蒲を挿した端午の気分の中で贈ったと思われる。そこで、端午の日にはどのような色彩が注目されていたかということをも王朝文学の中で見ていくこととしよう。

『源氏物語』蜃の巻には、端午の日の源氏の服装について次のように叙述されている。

御さま、つきせず若く清げに見えたまふ。つやも色も、こぼるばかりなる御衣に、直衣はかなく重なるあはひも、いづこに加はれるぎよらにかあらむ、「この世の人の染めいだしたる」と見えず、常の、色もかへぬあやめも、今日は珍らかに、をかしく思ゆる薫りなども、「おもふことなほ、をしかりぬべき御有様かな」と、ひめ君は思す。

玉鬘の目に映った源氏の姿が「つやも色も、こぼるばかりなる」・「直衣はかなく重なるあはひ」・「この世の人の染めいだしたる」と見えず」というように色彩中心に述べられている。御衣は、日本古典文学大系の頭注によると、単衣とその上に着る袷から成り、源氏の年齢では単衣には紅を用いることになっている。御衣の上は何気なく重ねている直衣は缥色（せう）であり、両者の配色が非常に美しく感じられるのである。「常の、色もかへぬあやめも、今日は珍らかに」

という箇所には端午の日であることを意識していることが窺われるから、源氏の服装における紅と缥の配色美は、普段と同じ服装ではあるものの、端午の気分の中で新鮮さを感じていると解してよいであらう。

さらに、源氏以外の人々の服装及び調度の色彩も記述されている。

廊の戸口に、み簾あをやかにかけたわたして、今めきたる裾濃の御几帳どもたてわたし、童・下仕へなどさまよふ。菖蒲製のあこめ、二藍の羅の汗衫着たる童べぞ、西の対のなめる。このましく馴れたるかぎり四人、下仕へは、あふちの裾濃の裳、撫子のわか葉の色したる唐ぎぬ、今日の上そひどもなり。こなたのは、濃きひと（へ）製に、撫子製の汗衫など、おほどかにて、おの／＼、いどみ顔なるもてなし、見どころあり。

これは端午の日の六条院を描写した部分であるが、調度では、御簾の緑と几帳の紫が端午の日に注意を引く色として取り上げられている。服装では、菖蒲製（せう）（表青・裏紅梅）の柏の上に重ねた薄紫の薄手の汗衫、薄萌黄の唐衣と棟製（とうせい）（表紫・裏薄紫、或は表薄紫・裏青）の裳、濃紅の単製の上に着けた撫子製（ぶしせい）（表紅梅または蘇芳・裏青または薄萌黄）の汗衫を端午にふさわしいものとして着用している。最後の濃紅の単製と撫子製の汗衫の取り合わせは全体的に紅の勝った色彩を呈すると思われるが、その他は、調度・服装ともに緑・紫・青という青色系の色彩を取り上げる傾向が見られる。

『源氏物語』の他にも、端午の描写の中に調度や服装の色彩を記したものはあり、例えば『榮花物語』巻六「耀く藤壺」及び巻八「初花」には次のように書かれている。

はかなく五月五日に成ぬれば、人／＼菖蒲・橘などの唐衣・表着なども、をかしう折知りたるやうに見ゆるに、菖蒲の三重の御木丁、共薄物にて立て渡されたるに、上を見れば御簾の縁もいと青やかなるに、軒の菖蒲も隙なく葺かれて、心ことに目出度をかしきに、御薬玉・菖蒲の御輿なども参りたるも珍しうて、若人／＼見興ず

(巻六「懼く藤壺」)

五月五日にぞ(中略)御簾際の柱もと、そは／＼などより、わざとならず出でたる袖口、こぼれ出でたる衣の端など、菖蒲・棟の花・撫子・藤などぞ見えたる。上には隙なく葺かれたる菖蒲もこと折に似ずおかしうけ高し。

(巻八「初花」)

調度では、几帳のとばりの青と御簾の縁の緑が、服装では菖蒲襲・橘襲・撫子襲・藤襲(表薄紫・裏青)が取り上げられており、『源氏物語』同様、撫子襲以外は青色系の色彩となつてゐる。また、両巻とも、調度や服装の色の記述に続いて軒の菖蒲に言及していることから、調度や服装の色は軒の菖蒲に代表される端午の日の気分の中で捉えられていることがわかる。以上、『源氏物語』及び『榮花物語』の描写より、端午の雰圍気の中では調度や服装など青色系の色彩が目を引くと言えよう。

三、加右衛門による紺色の発見

加右衛門が芭蕉達に餞別した草鞋の染緒は紺で、やはり青色系の色彩である。紺色も、『源氏物語』に見える縹・二藍とともに藍染めによるもので、三者の中では紺が最も濃い色ではあるが、三者は近似した色彩である。したがって、加右衛門が端午の気分の中で紺の染緒を美しいと感じたところには、王朝人の色彩感覚との類似性

が認められる。

ところが、紺は王朝文学で取り上げられていた縹や二藍などの青色系色彩に含まれるものの、貴族の服装に紺を用いた例は見られず、このことから、貴族の服装や調度に用いられている青色系色彩は、紺と色相の類似するものの、用いられ方に差異があると思われる。

『源氏物語』螢の巻では、紺色が端午の競射に出場する近衛の舍人達の装束に用いられている。

舍人どもさへ、艶なる装束をつくして、身を投げたる手まどはしなどを見るぞ、をかしかりける。

舍人達が競射に臨んで着飾っている様であるが、「艶なる装束」とは具体的には、日本古典文学大系の補注によると、裾色(濃紺)或いは濃藍色(殆ど黒)の袍の上に緋の錦で仕立てた前・後裾から成る打掛を着すものだという。紺は、貴人の雑用を勤める舍人の装束に使われ、しかも緋とともに用いられ華麗な印象を与えている。

『源氏物語』では源氏の直衣姿を「きよら」と評し、『榮花物語』では女房装束及び軒の菖蒲を「け高し」と言っていることより、これらのものは気品のある美しさという印象を持っていることがわかる。また、『源氏物語』の舍人の装束も、ここでは紺が用いられているが緋錦の打掛とともに着用して「艶なる」美しさを漂わさせている。

これらに対し、加右衛門が餞別した草鞋の紺の染緒は紺のみであるから、「きよら」・「け高し」・「艶」といった印象とは異なると思われる。鷹司綏子氏の近世農民服飾に関する御論文(注5)によると、紺地は強靱で破れにくいために農家の労働着として重宝され、東北では

紺屋に委託せず各家で行なう地染めによっていたため濃紺が主流となっていたということである。また、岡野和子氏作成「近世農民衣服関係奢侈禁止令年表」によると、寛文六年十一月・寛文八年三月・同年六月と仙台藩では紫及び紅梅染の使用禁止令を出し、同八月には「衣類模様つきもの染直しに及ばず、着破れた時は、紺・浅黄・茶・鼠その他の色でも模様なしに染めること」という模様染めの禁止令を發布している。染めるべき色として紺・浅黄・茶・鼠を挙げているのが注目される。この記事より、紺は茶・鼠などと共に地味で最も平凡な色であったと考えられる。また、年間を通して用いられているから、紺は季節感にも乏しく非常に日常的な色であったと思われる。加右衛門はあやめを茸く季節における紺の美しさを染緒に感じ取ったからそれを芭蕉達に贈ったのであるが、加右衛門が感じた美しさは、『源氏物語』・『榮花物語』の貴族の服装や調度の醸し出す「きよら」・「け高し」という感じとは相違し、また『源氏物語』の舎人の装束のように紺とともに用いるために生じる「艶なる」美しさとも違う。農家の労働者の代表的色彩である紺の染緒には庶民的で素朴な味わいがあると思われる。

四、風流のしれものの実

さて、加右衛門から紺の染緒の草鞋を餞別された芭蕉は「さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其実を顕す」と述べている。即ち、加右衛門が紺の染緒に季節感を感じ付けた美しさを見出したことを指して、風流のしれものとしての本領を發揮したと言っているのである。次に、この餞別に至るまでの地の文より、芭蕉の言う風流のしれものとはどういうものかを検討し、風流のしれものの「実」の

意味を明瞭にしたい。

この者、年比さだかならぬ名どころを考置侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の気色、思ひやらるゝ。玉田・よこ野、つゝじが岡へ、あせび咲ころ也。日影ももらぬ松の林に入て、爰を木の下と云とぞ。昔もかく露ふかければこそ、「ミさぶらひミかさ」とハよみたれ。薬師堂・天神の御社など拝て、其日ハくれぬ。

ここでは、加右衛門の案内による歌枕探訪が記されている。芭蕉の歌枕探訪は『おくのほそ道』の旅以前にも見られ、そのひとつ、『更科紀行』の旅の折には猿雖宛（推定）書簡（元禄二年二月以前筆）に、

去秋は越人といふしれもの木曾路を伴ひ、棧のあやうきいのち、嬭捨のなぐさみがたき折、きぬた・引板の音、しゝを追ハすがたすたか、あはれも見つくして、御事のみ心におもひ出候。

と認めている。同伴者越人に対して「越人といふしれもの」と言っており、「おくのほそ道」宮城野条で加右衛門を「風流のしれもの」と称しているのとよく似ていることが注目される。『更科紀行』の旅では、芭蕉と越人は木曾路を辿りながら木曾の棧・嬭捨山を巡覧している。木曾の棧は、

おそろしやきそのかけちのまろ木ばしふみみるたびにおちぬべきかな
(千載・雑下・二壺、空人法師)

の歌のように、渡るのに非常に危険を伴う橋として詠まれていて、芭蕉書簡の「あやうきいのち」も歌のイメージを踏まえている。嬭捨山は、

わが心なぐさめかねつさらしなやははすて山にてる月を見て

(古今・雜上・六六、よみ人しらず)

を初めとして、慰め難い心情を表白した歌歌が多く、芭蕉書簡の「なぐさみがたき折」という言葉も古歌を踏襲したものである。また、砧・鳴子(書簡には引板)の音・鹿も和歌で秋の本情とされてゐるものばかりである。このように、芭蕉と越人は、木曾の歌枕探訪において歌枕の本意を尋ね、古歌のイメージを追い求めている。「しれもの」とは、歌枕を巡見し、その風流に心酔する風流人の意と捉えることができる。

『おくのほそ道』宮城野の条の歌枕探訪も木曾の歌枕探訪のいわば延長線上にあるものとして考えることができる。加右衛門が案内した歌枕は、宮城野、玉田・横野、つつじが岡、木の下であるが、その叙述は、宮城野からつつじが岡までは「秋の気色、思ひやらの」と、「あせび咲ころ也」といった滑らかな言い回しとなっているのに対し、木の下では「爰を木の下と云とぞ。昔もかく露ふかければこそ、『みさぶらひみかさ』と『よみたれ』と『ぞ』・『こそ』・『は』』という強調表現が用いられ、文の調子に変化が生じている。宮城野は萩の名所として知られる歌枕で萩の花の咲き乱れる風情を詠んだ歌が非常に多い。「宮城野の萩茂りあひて」はこのことを踏まえた叙述であるが、続く「秋の気色、思ひやらの」には、時期外れの訪問であったために宮城野の秋の感興を思いやる心情が表出されている。次の玉田・横野、つつじが岡も、宮城野と同様に季節外れの訪問であったために、「あせび咲ころ也」と、歌に詠まれているあせびの花に思いを馳せることとなった。かつて、『笈の小文』の旅で、秋を本意とする須磨を夏に訪れた折も、その本意に触れ得ず、月見ても物たらずや須磨の夏

と詠んでいる。ここには、歌枕の本意を希求する心が顕著である。『おくのほそ道』の宮城野、玉田・横野、つつじが岡の記述の方はもう少し押さえた書き方になっているが、やはり歌枕探訪で古歌に詠まれているものを目にすることができないことの心惜しさは強かったと思われる。

ところが、木の下はこれらの歌枕と事情を異にしている。歌枕木の下に代表的歌材は露であるが、それは初出の『古今集』大歌所御歌に見られるように雨にも勝る程の露である。そして芭蕉が加右衛門に案内されて立ち寄った松林の状況は「かく露ふかければこそ」と言っているように歌の本意に叶っている。また芭蕉は「日影ももらぬ松の林に入て、爰を木の下と云とぞ」と述べているが、「日影ももらぬ」は古歌に詠まれている木の下に合致する。即ち、古歌には次のように詠まれている。

露にだにみかさといひし宮城野の木のしたくらき五月雨の比

(新千載・夏・三三、中務卿宗尊親王)

宮城野の木の下やみにとぶはたる露にまさりて影ぞみだるゝ

(草庵集・三三、頼阿)

前者は五月雨に降り籠められて暗々とした木の下が詠まれている。後者も蛍の光が見える程の暗闇である。このように、木の下は闇をも本意とし、芭蕉の「日影ももらぬ」という言葉はこれを踏まえていると思われる。

宮城野、玉田・横野、つつじが岡では、古歌に詠まれている萩の花やあせびの花の実景を目のあたりにすることができず、その情景を思いやる体となったのであるが、木の下では、古歌に詠まれている暗闇としどに降り敷いた露の両方を実際に体験することができ

た。木の下で歌の本意に触れ得た心躍りが、木の下での叙述をつつじが岡までの口調を一転した弾んだ調子のものでしたと考えられる。

以上のように、『おくのほそ道』宮城野の条の歌枕探訪においても木曾路や須磨と同様に歌枕の本意に対する求心が見られ、特に木の下では加右衛門の案内により歌枕の本意を追体験し歌枕の感興を満喫することができたのである。この感興は芭蕉一人のものではなく、案内者加右衛門との共感の上に成り立っていると考えられる。

芭蕉は加右衛門を、自分と同じように、歌枕を尋ね、その本意に興ずる風流人と見たからこそ、「風流のしれもの」と言ったと思われるからである。「風流のしれもの」とは、越人を「しれもの」と呼んでいたように歌枕探訪に心酔する風流人の意であり、宮城野以下の歌枕探訪に堪能する芭蕉と加右衛門は正にそれである。

さて、加右衛門が見出した紺の染緒の美しさは、紺の染緒を実用面においてのみ眺めている限りでは感得し難い美しさである。つまり、現実生活から抜け出して対象を眺める必要がある。そして、この脱現実生活の態度は、取りも直さず、歌枕探訪についても言えることである。現実生活での見方に縛られている者にとっては、紺の染緒は虫よけになるといふことや強靱さに価値があるのであって色彩の美しさに感動するといふことは起こりにくく、歌枕は現実生活と関わりのないものでましてや歌枕で古人の心に触れるといふことはなされにくい。宮城野の条の歌枕探訪と紺の染緒の発見は現実生活の価値観から離脱しているという点で同じである。したがって、広義の「風流のしれもの」とは、現実生活の価値観を離れた世界に心を遊ばせその世界に心酔する者といふことになる。しかし、また、歌枕は和歌以来文人墨客が取り上げてきたのに対して、紺の染緒

の美しさは和歌の伝統には見られない新しいものであるという相違点もある。歌枕探訪には加右衛門の独自性は見られないが、紺の染緒を美の対象として取り上げたことには加右衛門の独自性・個性が発見している。芭蕉の「さればこそ風流のしれもの、爰に至りて其実を顕す」という言葉は、加右衛門における歌枕探訪と紺の染緒の発見の相違に言及したものとして受け止められ、「其実」とは、風流の伝統に親炙することによつて培った目で己自身の新しい美を発見したことを指すと思われる。今まで誰も取り上げなかった紺の染緒の美しさを発見したところに、芭蕉は、古歌の追従に留まらぬ加右衛門の「風流のしれもの」としての確かさを看取したのである。

五、「あやめ草」の句意

最後に、これまでの考察を踏まえて、「あやめ草」の句意について述べて置きたい。この句は、加右衛門が端午の気分の中で紺の染緒の美しさを発見し、その美しい草鞋を芭蕉達に贈ったのを受けて詠まれたものである。芭蕉はこの紺の染緒を「草鞋の緒」として句の下五に据えて、「あやめ草足に結ん」と、その染緒の辺りにあやめ草を結び添えようといふのである。勝峯晋風氏は、紺の染緒とあやめ草の共通性について、あやめ草の「青さが滴るやうな苦酸性、殊にあの葉をもんで絢へば緒になるやうな類似さ」を挙げるとともに、「その色彩の対照美」・「紺と青の色彩的うつりのよさ」を指摘されているものの、あやめ草と紺の染緒の対照美を詠んだ句とするのではなく、右のような両者の関係から紺の染緒にあやめ草を想起し、あやめ草を草鞋の挿頭にするという風流を思いついたことを句

の主眼とするという従来通りの解釈を取っている。^(在)芭蕉があやめ草を紺の染緒の辺りに結ぼうと詠んだのは、あやめ草を草鞋の挿頭にするという風流な思いつきではなくて、むしろ、あやめ草の日の露の霏の中に加右衛門が紺の染緒の色彩美を捉えたことを受け、實際にあやめ草を足に結び付けることよって紺の染緒に漂う端午の気分を一層盛り上げるとともに、これらの色彩の対照美を詠じたと思われる。

『枕草子』三九段は端午について述べたものであるが、清少納言の鋭い色彩感覚が窺われる。

節は五月にしく月はなし。菖蒲・蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし。九重の御殿の上をはじめて、いひしらぬ民のすみかまで、いかでわがもとしげく葺かんと葺きわたしたり、なほいとめづらし、いつかは、ことをりにさはしたりし。空のけしき、くもりわたりたるに、中宮などには、縫殿より御薬玉とて、色々の糸を組み下げて参らされたれば、御帳たてたる母屋のはしらに、左右につけたり。

まず、軒に葺き渡された菖蒲や蓬の景観が曇天とともに語られている。この菖蒲と曇天の描写は別本二七段にも見える。

池ある所の五月長雨のころこそいとあはれなれ。菖蒲・菰など生ひこりて、水もみどりなるに、庭もひとつ色に見えわたりて、曇りたる空をつくづくとながめくらしたるは、いみじうこそあはれなれ。

ここでも菖蒲が取り上げられていて、菰とともに池の水面に映えている景色が描かれている。そして、それが曇天であることが留意される。三九段の軒の菖蒲も別本二七段の池の菖蒲も曇天の下であ

って、ここには、鮮明な色彩を持つ菖蒲を曇り空の下で眺めたいという清少納言の美意識が認められる。

『枕草子』八九段はなまめかしきものを列挙しているが、菖蒲についての記述も見られる。

薄様の草子。柳の萌え出てたるに、あをき薄様に書きたる文つけたる。三重がさねの扇。五重はあまりあつくなりて、もとなどにくげなり。いとあたらしからず、いたうものふりぬ松皮葺の屋に、ながき菖蒲をうるはしうふきわたしたる。(中略)

五月の節のあやめの蔵人、菖蒲のかづら、赤紐の色にはあらぬを、領布・裙帯などして、薬玉・親王たち・上達部の立ち並み給へるに奉れる、いみじうなまめかし。

それ程際立った美しさではないが、何とはなしにそのしつとりとした美しさを感じられるものひとつとして、松皮葺の屋根に葺き渡した菖蒲やあやめの蔵人の装いが挙げられている。新しくもなく古くもない程々の松皮葺の屋に端正に葺き渡された菖蒲や、あやめの蔵人の菖蒲の髪と赤紐を用いた扮装は華やかというよりはおとなしい美しさであるが、ここで注目されるのは、菖蒲と取り合わせられているものがいづれも鮮明さを欠く色合いであるという点である。菖蒲とふさわしくないものとして挙げられている古びた松皮葺の屋根は鮮明さを欠くものではあるが、あまりに古くなっているものだと菖蒲の爽快な美しさと調和しない。また、真新しいものは鮮明な色合いであるためにかえって菖蒲の鮮やかさを損うこととなる。一方、赤紐は「色にはあらぬ」とあって華美で色鮮やかなものではないことがわかる。この菖蒲と赤色の取り合わせは二二五段にも見られる。

五月四日の夕つかた、青き草おほくいとるはしく切りて、左右になひて、赤衣着たる男の行くこそをかしけれ。

これは、季節の情趣を描いた章段のひとつで五月四日の菖蒲刈りの風俗を写している。刈り取った菖蒲を担い行く男が着ている赤衣は、古典文学大系の頭注に「褪紅色に染めた布の狩衣」という説明があり、鮮明な紅色に比べ地味な色合いであると思われる。これもやはり八九段の赤紐と同様に鮮明さを欠く赤色である。

以上のように、菖蒲と並べられているものを見ると、曇天・ある程度の時を経た松皮葺の屋根・「色にはあらぬ」赤紐・赤衣というように、明暗では暗の方に属し、或いは鮮明さに乏しい色調のものである。したがって、このことから、鮮明な色を持つ菖蒲はほの暗いところで眺めたり、不鮮明な色合いのものと取り合わせると美しいという美意識が帰納される。そして、芭蕉の句は、この清少納言の美意識と同様の意識からの発想によって、暗色で鮮明さに乏しい地染めの紺の鼻緒と折からの鮮やかなあやめ草の対象美を詠んだものと考えられる。芭蕉の句は、加右衛門が鑑別してくれた染緒の色彩美をあやめ草との対照で捉えたものである。そこで、句意は、あやめ草を軒に葺く季節感の中で日頃は気にも止めていなかった紺色がとても美しく感じられる、色鮮やかなあやめ草を足に結んでみようかしら、きつと草鞋の紺の染緒はあやめ草の色に映えていよいよその美しさを増すであろうということになる。――「結ん」――「結んでみようか」としたのは、あやめ草を紺の染緒の辺りに結び付けた様を詠んだのではなく、実際に眼前にあるのは紺の染緒の草鞋だけだからである。芭蕉の句は、加右衛門が発見した紺の染緒の美しさを詠んだものである。

『おくのほそ道』宮城野の条は、「風流のしれもの」である加右衛門が紺の染緒という誰も取り上げなかった新しい美を発見したことを語った条で、芭蕉の句は、加右衛門の発見を受けて紺の染緒の美しさを賞揚し、あやめ草を結び添えることによってさらに季節感を盛り上げるとともに染緒の紺色を引き立たせようとしたものである。従来のようにあやめ草を足に結び付ける風流を詠んだものと見ることは当たらない。芭蕉があやめ草を挿す風流に興じるという内容ではなく、加右衛門が紺の染緒の美を見出したという事柄を全面的に押し出した条である。芭蕉が描いて見せたのは、加右衛門の新しい美の発見と、そこに窺われる「風流のしれもの」としての「衷」である。芭蕉の句は、加右衛門の美の発見に共感を覚えて作られたもので、加右衛門の発見に依るところが大きいといえる。

(注)

1、佐々木清氏『おくのほそ道研究と鑑賞』（昭和59年刊）

2、日本古典文学大系の頭注に「直衣の色も色々あるが、源氏は二藍ふたあいか又は縹はなだ――浅葱の直衣を着て居たのであろうか。」と見えるが、江幡潤氏『色名の由来』（東書選書74 昭和57年刊）に「その色の傾向としては若者は二藍（藤納戸ともいう紅藍の交染によるに、青紫色）、壮年者は縹色（Antique Blue Orient Blueとも）、老齢者は白であった。」とあるにより、縹とする。

3、玉上琢彌氏『源氏物語評釈 第五卷』（昭和40年刊）に、「上が白く、下にゆくほど色の濃い、いわゆる裾濃の帷子。これは紫色が多い。」とある。

4、松村博司氏『日本古典評釈全注釈叢書 染花物語全注釈

二) (昭和46年刊)に、『栄華物語詳解』は「青の濃き薄き、白紅梅の濃き薄きとをかさぬる」ものとし、『新訳栄華物語』は「青色の濃淡を混ぜた三重の薄物にしたものか」と注することを紹介している。

5、鷹司綸子氏「近世以降に於ける農民服飾の研究——染色に関する一考察——」(和洋女子大学大学紀要16 昭和47年刊)

6、岡野和子氏「近世庶民衣料の一考察——奢侈禁止令よりみた農民衣服——」(東京家政学院大学紀要7 昭和43年刊)

7、『奥の細道創見』(昭和24年刊)

なお、『おくのほそ道』は『芭蕉紀行総索引下』から、『源氏物語』・『栄花物語』・『枕草子』・猿蓑宛(推定)書簡・須磨の句は日本古典文学大系から、『千載集』・『古今集』・『新千載集』は『新編国歌大観』から、『草庵集』は『私家集大成5』から、各々引用し、その際、漢字は現行の字体に改めた。(昭和61年7月16日稿了)

〔付記〕本稿を成すにあたり、米谷巖先生には終始懇切な御指導をいただいた。先生のお導きに対し、心より感謝申し上げます。

——広島大学大学院博士課程後期在学——